O1-3　環境調整と作業遂行を通した称賛によりBPSDが改善した事例

○戸井 基茂（OT）[1)]，西田 斉二（OT）[2)]

1）医療法人社団向陽会 向陽病院

2）四條畷学園大学 リハビリテーション学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

Key word：認知症，BPSD，環境調整

【はじめに】環境の影響によりBPSDである暴言を引き起こしていた事例に対して作業療法士（以下，筆者）が多職種連携を通じて環境調整を行った．また，事例の作業遂行に対して称賛して関わった．その結果，BPSDである暴言が軽減した．この経過について考察を踏まえ報告する．尚，当発表においては当院の承認と事例の同意を得ている．

【事例紹介】80代前半，女性，妄想性障害，アルツハイマー型認知症．職歴は旅館の清掃業．X-4年，夫と生活していたが「お金を盗られた」と被害的訴えをするようになった．X年，症状が悪化したため当院へ医療保護入院となる．

【作業療法評価】X年+8年，閉鎖病棟に入院中．Mini-mental State Examination（以下，MMSE）は13/30点で，見当識障害，記銘力障害を認めた．FIMは89/126点で歯磨きが不十分で口臭がある．また，食後やおやつ時に被害的な内容の暴言が多い．その内容も含め認知症行動障害尺度（以下，DBD13）は21/52点である．

【経過】看護師（以下，Ns）から筆者に事例の歯磨き指導の依頼があり，声掛けで歯磨きができることを目的に週5回，昼食後に約10分間関わることとなった．1週目，「ひどい扱いを受けている」といった被害的な訴えをして歯磨きに集中できず，口腔に昼食の残留物が残った状態であった．そのため，口腔を濯ぐことから声かけを始めた．この時期，事例は食べきれなかったおやつを誤嚥注意者に渡すという行動があった．Nsから注意を受けるが，おやつを渡したこと自体も忘れ同様のことを繰り返したため，おやつをもらえないという状況であった．そこで，おやつを必ずもらえるように見守りの中，食べ切れる量を事例に渡すことをNsと筆者で申し合わせた．事例はおやつをもらえることを喜んでいた．3週目，歯磨き時の被害的な訴えは無くなり，筆者の声かけで口腔を濯いでから歯磨きができるようになった．また，事例が洗面台を掃除したことを称賛したところ，旅館で働いていたことを誇らしげに話した．そこで事例が洗面台を掃除した時に称賛するようにした．この時期から口臭はなくなった．12週目，事例は筆者に「いつもありがとう」と笑顔を見せるようになった．また，おやつを他者に渡すことがなくなったため見守りも不要となった．この時期Nsから「食後の暴言が減り，感謝の言葉を聞くようになった」と報告を受けた．

【結果】介入12週間後，FIMは93/126点となり声かけで歯磨きができるようになり，口臭が無くなった．また，食後やおやつ時の暴言が減った．それに伴いDBD13も17/52点と改善した．

【考察】事例のBPSDである暴言について原因の一つは「自分だけおやつがない」と感じる環境によると考えられる．それにより些細なことでも被害的に受け取りやすい心理状態となり，おやつの場面以外でも暴言が見られていたと考えられる．そこで筆者とNsで協力しておやつを必ず渡し，見守るなどの環境調整を実施した結果，被害的になることが無くなった．加えて，事例にとって洗面台の掃除を称賛されたことは“今”安心を感じられる体験であり，被害的に受け取りやすい心理状態を緩和する方向に作用したと考えられる．そのため，おやつの場面以外でも心理状態が改善し，暴言の減少や歯磨き指導の受け入れが可能になり，口腔を清潔に保てるようになったと考えられる．OTの役割として，まずはBPSDの現状及び原因を評価し，必要に応じて多職種連携し環境調整することで原因へのアプローチを図ることが重要である．またBPSDの根底には記憶障害により漠然とした不安が存在するともいわれており，作業遂行を通して些細なことでも称賛し，具体的で安心感や快感情を持てるように関わることが重要と考える．